妻の介護

郷　芳美

三年くらい前、朝夕の食事や料理等で、最近何か妻の日々の生活や送り方が、変だなと感じていたところであった。某日、夕食を二人で済ませて寝たのに、八時頃突然起きあがり、おぼつかない足どりで、倒れないように、両手を拡げて居間に行き、ソファに坐ったので、行って何事だろうと尋ねると、「夕飯をまだ済ませていない」と言うので、「もうさっき二人で食べて寝たんだがね」と言うと、「いやまだ食べていない」と言い張るので、再度用意して食べさせて、寝かしたのであったが、これはこの頃変だなあと、痛感しながら過ごしていたのであった。当時はまだ病名が判らず、ただ困っていたのである。

そのうち、漏らすようになり、倒れたりして、私独りでは介護が手に負えなくなったので、人伝てに聞いていたグループホームのＩ氏に、相談したところ、空室があるからと、入居を許可されたので、忘れもしない二十三年二月二十五日であった、娘らと三人で同ホームに行き、種々相談しお願いして、入居が正式に決まり、帰宅しようとした時である。広間に、十数名の老人が坐している、その傍にあった椅子に、腰掛けていた妻に、「また来るからね」と、手を振った時であった。妻が両手を挙げて、（私もいっしょに帰るから、連れて帰ってくれ）と、黙って立ちあがり、身を倒れんばかりに乗り出して、後追いをした姿、不憫と思いつつも、妻の願いを振り切って、帰宅しなければならなかった事情、済まないと思いながら頼んできた事を想い出すと、胸がいっぱいになり、いつも涙が漏出する。

同ホームに入居以来、私も毎日朝夕の二回、家から二十五分位かかるホームまで、急な坂を登り下りして、真夏も真冬も、妻の見舞いを続けた。同ホームに入ると、「よく来たね」と、いつもにっこり笑って、迎えてくれる妻の見舞いが、毎日楽しい日課になっていったのであった。

妻もその後は、日を追って、事務長さんや看護師さん等と馴染んで、たいへん親しくなり、（いつもにこにこして迎えてくださるムツ子さん、これからもからだに気を付けて、過ごしてくださいね）という文と、妻の写真を貼ったしおりを、部屋に貼ってくださったり、出張された時など、帰りにわざわざ当地の人形等を土産に届けてくださり、私が訪問すると、事務長さんや看護師さん等が集って来て、「い

つもムツ子さんは、優しい笑顔で、逆に私達を力づけてくださいますよ」と言って、家内の頬を撫でてくださると、妻はたいへん喜び、笑って、毎日楽しく過ごさせてもらっていて、私も心から有難く感謝し、安心して、いつも深々と、スタッフの皆さんに、頭をさげて、お願いをし、帰っていたのである。ご主人が毎日詰めて、お見舞いに来られるから、ご主人が先に倒れられるかもしれないと、看護師さん等が多忙な毎日なのに、わざわざ雨の降る寒い日などに、私を自家用車で、私宅まで送っていただいたことが、何回もあったのである。

私は、妻が若い頃、福岡の八幡製鉄所の事務員として、勤めていた頃、結婚の為、退職した際に貰った、退職金百円を全部はたいて、上歯の左側に、記念の金歯を入れていて、いつも笑うときらりと光るので、私はそれを見たくて、妻に催促して、故意に笑わせ、独り黙って悦に入り、楽しんでいた時もあった。

五月二十五日（金）であった。妻の病気が判らなかったので、N病院の脳外科で診断して貰ったところ、三十数項目の認知度テストや、レントゲン、CT、MRIの検査により、認知症と脳梗塞という診断がくだり、娘等とたいへんがっかりした日であった。その後、病は徐々に進行して行き、話が出来なくなり、しゃべらなくなって、口を閉じて、入れ歯の出し入れを拒み、食事を摂取できなくなったので、CVポートを右腕の上部に入れて貰って、薬や栄養剤を摂ることになっていったのであった。

日を追って、病は次第に進み、年金を十万円貰ったよと告げても、唯笑っているのみで、また「ほら、あんたが植えた柿が、こんなに大きくなったよ」と言って、左手に握らせても、喜ばず、言葉が殆んど、出なくなっていった。

何をしても、何と言っても、唯天性のものか、いつも笑みを与えてくれるだけで、にっこり笑い返す仕草は、私への最高の喜びと感謝であろうと思い、また来るからねと言って、帰る日々であったのである。

介護士等に支えられて立ちお湯浴びて食盛る匙に口開く妻　某誌へ投稿

認知病み右手右足揉み擦する静かに満つる笑みを望みて　某所へ投稿

二十四年七月十九日のことである。S病院へ移送されて、院長さんが重要な診断をしてくださったのであった。院長さんの診断は何と、余命は約三ヶ月位であろう

とのことで、家族はみんなびっくりした日であった。

某日、妻の肩揉みをしてやろうと思い、両手で肩のうしろを揉んでやると、頭を前面に持ちあげて、揉んで欲しいという、気持ち良い表情を示したので、たいへん嬉しくなり、何回も長く揉んでやると、黙って喜び、終わると静かに頭をおろして、ほっとした表情が、私の最後に受けた唯一の嬉しい、懐かしい想い出で、宝となっていることで、忘れられない。

日を重ねて、妻の体力は弱くなり、何を食べたい、ここが痛いとか、これをどうかして欲しい等々、一回も全くひと言も、不平不満を漏らすことなく、最後まで柔和に過ごして来て、十月三十日、午後八時四十三分に、逝去していったのであった。

脳梗塞のせいであったろうか、家内の天性の性格の故か、判らずも、痛みや苦しみを訴えることもない、最後であったことは、家内にとっても、私ら家族にとっても、不幸中の一光明であったと思うと同時に、反面介護等充分に尽くしてやれず、済まなかったね、届かなかったと、後悔の念でいっぱいの心境であった。

どこのホームでも、病院でも、事務長さん、看護師さん等に、気持ちよく慕われ、看病していただき、家族一同心からたいへん感謝している。「逝きて知る妻の恩」。いつも我が家の主役となって、四人の娘を立派に成長させてくれ、ひたすら私や家族の為に尽くしてくれ、自らを何ら誇ることもなく、逝きし貴女よ。至らなかった介護等を後悔し、詫びて、仏壇に合掌し、心から感謝している毎日である。

郷　芳美（ごう　よしみ）
九十歳（大正十二年生まれ）
鹿児島市上之園町在住
昭和十九年鹿児島師範学校卒
小学校在職四十年